

# 日 本 の 点 字

## 第 43 号

---

### 目 次

|  |    |
|--|----|
| 新しい「表記法」を力に、<br>点字文化の未来の担い手の育成につなげたい！ …… 渡辺 昭一 …   | 1  |
| 『日本点字表記法』改訂版（2018年版）における<br>主な変更点 その2 …… 日本点字委員会 … | 6  |
| 特集「阿佐博先生、木塚康弘先生が残したもの」 ……                          | 12 |
| 木塚康弘先生との思い出 …… 日比野 清 …                             | 13 |
| わかりよい点字を目指された木塚康弘先生 …… 加藤 俊和 …                     | 15 |
| 阿佐博先生 安らかにお休みください …… 渡辺 勇喜三 …                      | 19 |
| 点字と酒とジャイヤンツ …… 水谷 昌史 …                             | 20 |
| 凸面点字器の開発と普及 …… 藤野 克己 …                             | 24 |
| 点字関連文献目録（その17） ……                                  | 29 |
| 2018年度研究協議会並びに第57回総会報告 ……                          | 35 |
| 数学・理科・情報処理点字表記にかンする改訂案概要 ……                        | 38 |
| 編集後記 ……  | 35 |

---

2019年 6 月

日 本 点 字 委 員 会

# 新しい「表記法」を力に、点字文化の未来の担い手の育成に繋げたい！ — 第6代会長就任にあたって —

日本点字委員会会長 渡辺 昭一

## 1 はじめに

この度、第13期日本点字委員会（日点委）の会長に就任しました渡辺昭一です。非力ではありますが、日本の点字の一層の発展に向けて全力を尽くす所存です。関係各位のご支援・ご協力のほどどうぞよろしくお願い申し上げます。

日点委は、2018年6月に開催した第54回総会において『日本点字表記法 2018年版』の発行を決定しました。私は当面、この新しい「表記法」の普及と啓発に全力を尽くす所存です。そして、点字文化の未来の担い手の育成につなげていきたいと強く願っております。

さて、21世紀になって20年を迎えようとしている今日、私たちは、19世紀に誕生した点字をフルに活用し、学習や研究、就労や社会生活全般において、その恩恵に浴しています。今後も視覚障害者が唯一自由に読み書きできる文字として、点字を大切に使い、一人でも多くの視覚障害者が点字を用いて社会参加できるように、社会環境などの改善を求めるとともに、より一層使いやすい点字となるよう改良のための研究を継続していかなければなりません。

ところが、現時点では点字ユーザーのみならず点訳者も減少しつつあります。

私は、京都において点訳講習会の担当を1993年度から今年度まで務めてきました。当初の入門クラスの受講者数は120名を超えており、これはこれで講師陣にとっては大きな負担でした。今年度かというと、平日と土曜日コースの2コースを合わせても40名あまりと約3分の1になっています。他府県で「募集はしたけれど受講者が集まらなかった」とか「2年に1回の講習にした」などの状況をお聞きすると、暗澹たる気持ちになります。

それでも集まってくださった受講者さんはとても熱心な方が多く、点字の読み方・

書き方に真剣に取り組んでくださっています。これからは、できるだけ途中落伍者が出ないような講習会の進め方が求められていると思います。それとともに、広報活動にも力を注ぎ、若い人たちにも受講してもらえる講習会を目指すべきだと思います。

一方点字のプロと言われる晴眼点訳者と触読校正者のレベルアップも喫緊の課題です。(次項で詳細について述べます。)

私は、視覚特別支援学校や福祉施設などにおける点字ユーザーを増やすための児童・生徒や中途視覚障害者への点字指導の充実、点訳ボランティアを養成するための講習会の広報と指導の拡充、そして、点字のプロである晴眼点訳者・触読校正者のレベルアップなどを進めることが、点字文化の未来を支える担い手の育成につながるものと確信しておりますので、点字関係者の総力を挙げて取り組みを強めていく必要があると考えております。

## 2 選挙公報製作に見る点字のプロたちの苦悩

日本は、世界で初めて1928年に国政レベルの点字投票が実施された国です。このことは、明治・大正期における点字文化を担ってきた先輩たちの大きな運動の成果であり、誇るべき実績です。

しかし、投票行為の前提となる候補者の選挙公報の点字版・音声版・拡大文字版の作成については法律上の定めはありません。選挙公報は、候補者が作成したものをそのまま印刷し配布するものとなっているため、候補者作成の墨字公報が読めない視覚障害者等にとっては、候補者の政見を知る手段は、テレビやラジオでの「政見放送」ぐらいです。

現状は、衆参両院の比例代表選挙（比例区、衆議院は11ブロック）及び衆議院選挙の際に行われる最高裁判所裁判官の国民審査（国審）の公報については、日本盲人福祉委員会（日盲委）が窓口となって、各都道府県選挙管理委員会（選管）から注文を受けて、日盲委選挙情報支援プロジェクト点字版部会（以下プロジェクトと記す）に参加する施設・団体等（以下施設と記す）が分担して、「点字版選挙のお知らせ」（点字毎日号外）として、全文点訳・校正（最終校正は毎日新聞社点字毎日部）・製版・

印刷・製本を行い、それを各選管が購入して配布する形で、情報保障が行われていません（実際の配布方法は地域によって異なるので、個人の点字ユーザーに届いていないケースもあるかもしれません）。参議院の選挙区及び衆議院の小選挙区については、日盲委に依頼があれば点字毎日号外として全文点訳版「点字版選挙のお知らせ」を製作していますが、地域によっては地元の施設等に依頼して製作しているところもあり、必ずしも全文点訳となっていないところもあるかもしれません。

これらの法律上の根拠は、公職選挙法第6条の選挙における選挙人への啓発活動の一環であり、同法第167条にいう選挙公報製作の義務には点字等の事項は記載されておりません。

私は、日盲委プロジェクト点字版部会に設置された選挙公報点字表記委員会（表記委員会）の委員長を2009年度から仰せつかっており、この間、日盲委理事長からの諮問に対する答申の提出や「点字版選挙のお知らせ」製作にかかわる職員等に対する研修会の開催、プロジェクト内外で製作された点字版選挙公報等の点検活動、そして、『点字版選挙公報製作必携』（2015年1月）の発行等を、関係者の多大なるご支援とご協力のもとに行ってきました。そして、「点字版選挙のお知らせ」製作の作業が、プロジェクト参加の施設にとって大きな負担となっていることを実感しています。その内容について述べさせていただきます。

#### 日盲委で製作した「点字版選挙のお知らせ」等の部数

※衆議院における「選挙区」の数値は、小選挙区を表す。

|         | 比例区    | 選挙区    | 国民審査   |
|---------|--------|--------|--------|
| 衆議院2009 | 38,597 | 35,003 | 38,380 |
| 参議院2010 | 34,704 | 27,936 |        |
| 衆議院2012 | 35,286 | 28,128 | 35,078 |
| 参議院2013 | 32,807 | 21,759 |        |
| 衆議院2014 | 33,760 | 24,713 | 33,560 |
| 参議院2016 | 31,266 | 20,965 |        |
| 衆議院2017 | 30,275 | 25,328 | 30,272 |

これだけの分量の「選挙のお知らせ」を選挙の公示日から5日～6日の短期間に製作し、選管等（地域によっては個別発送もあり）に発送しなければならないのです。また、選挙公報の点字版という性格上、通常の仕事とは異なり、墨字の誤字などはそのまま点訳し、点訳注も最小限に留めるようにしています。切れ続きは、「表記法」の認める幅の範囲内であれば、各点訳施設に任されています。

公示日を含めて3日間ほどは極度に緊張が高まります。京都は選管の立ち会い校正があり、そのあとに点字毎日の最終校正を依頼することになっています。立ち会い校正で選管から指示されたことで、点字毎日に伝えなければならない事項（例えばロゴマークの中の文字を点訳するかどうかなど）を校正依頼票という書類に書き漏らしてしまうと、点字毎日から問い合わせや修正指示がきます。本来、最終校正で修正指示などをもらうことはあってはいけないのですが、ちょっとした連絡ミスなどから修正指示をもらうことにつながります。各点訳施設のミスが多ければ多いほど点字毎日の最終校正に時間がかかり、それがまた点訳施設にとっての苛立ちの原因ともなります。

表記委員会設立以降、点訳施設等から寄せられた意見などをふまえて、ルール化したほうが良いところについては整理してきました。例えば候補者名を1番に書き、行頭から8マスあけることや、スローガンは4マスあけて書くことを原則とすることなどです。いずれも選挙公報ならではのレイアウトのルールです。そうした整理を行ってきたにもかかわらず、点字毎日の最終校正における指摘事項はむしろ増加傾向にあります。

1施設の作業量には限界があります。そのため、できるだけ多くの施設にプロジェクトに参加してもらい作業を分担してほしいのですが、新しく参加した施設にとっては不慣れな作業なので戸惑いが見られますし、従来からのプロジェクト参加施設においてもスタッフが変われば今までなかったようなミスが起こります。例えば、施設の内部校正で修正したファイルではなく、校正前の点訳ファイルを点字毎日に送ったという事例もありました。

職員研修会においてさまざまなミスについて報告を行い、注意を喚起していますが、なかなか効果は表れて現れていません。点字毎日に協力を求めながら、粘り強く表記委員会の取り組みを続けるしかないのかもしれないかもしれません。

このように点字のプロたちも、もがき苦しんでいます。点字文化の未来を支える担

い手の一翼として、レベルアップにつながる職員研修の仕組みづくりの検討が必要なのではないかと思います。

### 3 終わりに

最後に、『日本点字表記法 2018年版』の発行を受けて、その内容を普及・啓発する取り組みの具体化が急がれます。日点委に要望があればお寄せください。

私の研究活動の中心である近畿点字研究会では、「表記法」2001年版が出版された時には、その内容を詳細に検討し、意見をまとめて、日点委の研究協議会に発表しました。恐らく、2018年版についても詳細な検討が行われるものと思います。各地においても、そうした取り組みを具体的に検討していただきますよう呼びかけるものです。



# 『日本点字表記法』改訂版（2018年版）における 主な変更点 その2

2017年11月から2月まで、『日本点字表記法』改訂版の文案をホームページ等で公表し、広く意見を募った。公表した文案は第2章から第5章までで、6章・7章は『日本点字表記法 2001年版』そのままを案とした。その時点での2001年版からの主な変更点は、前号（第42号）の「日本の点字」等で紹介して来たところである。

その後、意見募集に寄せられた意見、2018年6月の研究協議会での討議を経て、第1編の第2～7章の内容がほぼ固まった。第54回総会において『日本点字表記法 2018年版』として発行することも決定した。残った第1編第1章と第2編の内容は、編集委員会によってまとめられた。

以下は、この間の主な変更点である。（前回に引き続いて変更のあった項目には「★」を付けた）

## 第1編 点字の表記

### 第1章 点字の記号

1. 第1章は点字の点の構成のみを規定する章と位置付け、『表記法』で取り上げるすべての記号を掲載した。用法については、2章以降を参照する形とした。
2. 第1節から第4節の構成は、発音記号符を掲載しない（「第2編 参考資料」のⅢ4.で扱う）こと以外は同じだが、第5節として「他の体系の点字記号への切り替え」を設けた。
3. 「第2節 4. 特殊音」では、分類に「開拗音」「合拗音」を用いないこととした。また、これまでの3分類を5分類とした。

## 第2章 語の書き表し方

### 【第2節 その他の仮名遣い】

- ★1. 2001年版では「外来語などで国語化の程度の高い語」「外来語などで国語化の程度のそれほど高くない語」「外来語などで特に原音に近く書き表す必要のある語」と別項目になっているものを、「1. 外来語や外国語、または外国の地名や人名の仮名表記」にまとめた。「外来語の表記」(1991年 内閣告示)に準じた項目立てとし、各項目に該当する仮名と用例を一覧できる形とした。

### 【第3節 数字やアルファベットなどを用いた語の書き表し方】

1. 「位取り記数法」という表現をやめ、「数符を前置して4桁までは数字で続けて書き表す。」のような表現とした。
  2. 「6. 漢字音で読む数の書き表し方」に【注意2】を設け、漢数字の形を表している場合は仮名(例：赤十字社)、アラビア数字の形は数字(例：4の字固め)で書き表すこととした。
- ★3. 「9. 文字や略称を書き表すアルファベット」の(1)【注意2】に、「大文字列の略称などの後ろに複数を表すsなど小文字の要素が付加されている場合は、あらためて外文字を前置して書き表してもよい」旨の規則を新設し、「NIEs」「SDGs」を用例として挙げた。また、2001年版の【注意4】にあるスラッシュに関する記述は、第4章第1節8.に移動し、規則を拡充した。
- 【備考】として、「外文字の有効な範囲は、英語などの基本となっているラテンアルファベット26文字(アクセント符の付いたアルファベットを除く)、大文字符・二重大文字符、ピリオド、スラッシュである。」旨記した。

### 第3章 語の区切り目の分かち書きと自立語や固有名詞内部の切れ続き

#### 【前文】

- ★1. わかりやすい表現を心がけた。また、第1節、第2節の前文と内容が重複する部分の調整を行った。

#### 【第2節 自立語内部の切れ続き】

- ★1. 前文3段落目、以下の文を削除した。

一方、日本語のリズムが4拍子であるなどと言われるように、4拍で意味のまとまりを持つことが多く、例えば、「うなどん」「学割」「プロレス」などのように、略語を作るときも4拍になることが多い。そのようなことから、どのくらいの拍数で区切るかということも考慮する必要がある。また、区切ってあるものを読みながらつないでいく方が、続いているものを、どこで区切るのかと考えながら読むよりも、意味を正確に読み取ることができる。

- 2. 「6. 動詞の連用形や形容詞の語幹に接続する動詞や形容詞」で、形容動詞に動詞などが接続する場合についても触れ（例：静か過ぎる）、タイトルを「動詞の連用形などに接続する動詞や形容詞」とした。
- 3. 「9. 年月日や名数など」において、「名数」の語を削除し「年月日など」とした。また、関連の深い内容である「漢字や仮名で書き表された単位」のすぐ後ろの6.に移動した。

## 第4章 文の構成と表記符号の用法

### 【第1節 文や語句の区切りと句読符の用法】

- ★1. 第2章第3節で【注意4】として扱われていたスラッシュを、新設の第4章第1節「8. 対等関係・比などを表すスラッシュ」に移動した。(アルファベットと数字、数字と数字の間でも使用できるようにした。ただし、分数線、日付の略記には用いない)

### 【第3節 語句や文の関係・省略などと関係符号の用法】

- ★1. 「6. 注の参照を示す文中注記符」に、隣り合う注記符は続けることを追加した。【注意】を以下のように改めた。  
注記があることをいち早く知らせる必要がある場合等では、文や語の直前に置いてもよい。  
また【備考】で、文字で「注1」「注2」と書く場合についても触れた。

### 【第4節 特殊文字としての伏せ字とマーク類の用法】

1. 前文3段落目に、符号類に代えて「文脈に応じた読み方を仮名などで書き表してもよい」ことを追加した。

### 【第7節 ホームページやEメールのアドレスなど】

- ★1. 2001年版の第4章第5節「7. 点字仮名体系における情報処理用点字記号」の内容を、ホームページやEメールのアドレス、SNSのアカウントなどの書き方にしぼり、コンピュータの画面やプログラムの解説等の書き方には言及しないこととした。また、用語を見直し、「大文字フラグ → **大文字符**」「数字フラグ → **数符**」など、馴染みやすいものに改めた。

## 第5章 書き方の形式と点訳のための配慮

【第1節 文章の構成と行替え・行移し・箇条書きなどの書き表し方】

★1. 2001年版の3.と4.を一つにまとめて「3. 見出し」とした。

## 第6章 古文の書き表し方

1. 用例の見直しを行った。

## 第7章 漢文の書き表し方

1. 漢文は書き下し文で書くことが原則であり、訓点符号を使った書き方は「漢語の構造や漢詩の字数、助字の存在などを明らかにする場合など」に用いるものであることをより明確にした。
2. 「第3節 漢文を点字で書き表す場合の配慮」を「書き下し文を点字で書き表す場合の配慮」として第2節に移動、訓点符号を用いた書き方は第3節に、表などをコンパクトにして掲載した。

## 第2編 参考資料

### I 用語解説

1. 2001年版の「点字の表記に関するキーワードの解説」を、表記法の文中に出て来た用語を辞書的に調べられる「用語解説」とした。文法、点字、図書などに関する語70語ほどを、五十音順に掲載した。

## Ⅱ 点字の歴史と意義

1. 2001年版の「Ⅱ 点字の意義と歴史」と同趣旨の内容を、歴史事項の更新、内容の整理などをした上で「点字の歴史と意義」としてまとめた。

## Ⅲ 各種点字記号

1. 第1章の一覧と重複する記号の掲載は避け、算数、情報処理、ギリシャ文字、発音記号の各点字の一覧を掲載した。

以上

## 特集 阿佐博先生、木塚泰弘先生が遺したもの

2018年に日点委は二人の先達を失いました。2月9日、木塚泰弘前会長(2002年度～2017年度)が逝去されました。82歳でした。木塚前会長は日点委の創立に尽力し、これまでのすべての「日本点字表記法」編集の中心人物であり、発足以来のすべての総会に出席するなど、日点委の歴史と共に歩んでこられました。

4月1日には、阿佐博元会長が95歳の生涯を終えられました。阿佐元会長も、木塚前会長同様、日点委に創立時から関わり、1990年度から2001年度まで会長を務められました。生前の石川倉次氏に会ったことがあるという、日本の点字の生き字引のような方でした。本号では、お二人と親好のあった方々に思い出を書きいただきました。

### 故木塚泰弘氏 略歴

1935年 東京都に生まれる

1951年 山口県立下関東高等学校入学。17歳の時に病気により失明、中途退学。2年間自宅療養する

1954年秋 山口県立盲学校聴講生を経て中学部編入学(1955年卒業)

1958年 東京教育大学附属盲学校高等部理療科卒業

1962年 早稲田大学第二文学部史学科(日本史専修)卒業

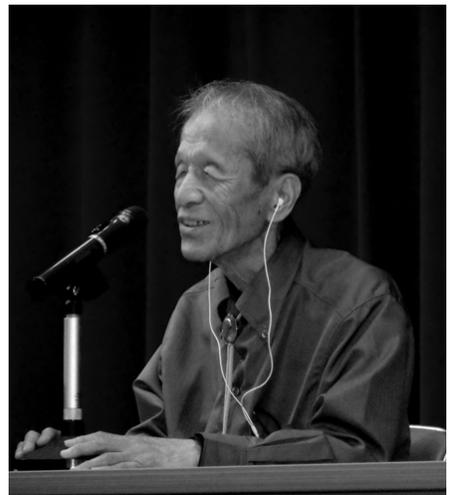
1962～1971年 東京都立久我山盲学校教員

1972～1999年 国立特殊教育総合研究所視覚障害教育研究部(研究員・室長・部長)

1999～2013年 日本ライトハウス理事長(退任後、名誉研究員就任)

2000～2004年 静岡文化芸術大学デザイン学部教授

2018年 逝去



### 日本点字委員会関係

1962年 日本点字研究会に参加、関東選出の常任理事

1966年 日本点字委員会発足に尽力、第1期から委員

1990年 第6期から副会長（3期12年）

2002年 第9期から会長（3期12年、3期目の最終年まで）

※「日本点字表記法（現代語篇）」「同 改訂版」「同 1990年版」「同 2001年版」編集委員長

### 受賞歴

1973年 第4回博報賞

1987年 内閣総理大臣表彰

2007年 第25回鳥居賞

2016年 第53回点字毎日文化賞

2018年 瑞宝小綬章、辻村賞

### 主な著書

1999年 『点字研究の軌跡—木塚泰弘退官記念論文集』

2002年 『わが国の障害者福祉とヘレン・ケラー』（共著、教育出版）

2013年 『目が見えなくなっていてきたこと』（小学館スクウェア）

---

## 木塚泰弘先生との思い出

日本ライトハウス 理事 日比野 清

私と木塚泰弘先生との出会いは、昭和37年都立久我山盲学校中2、久我山盲学校の開校の時であった。私は12歳で事故により全盲となり、将来は理療の資格を取得し、

両親が望んでいた治療院を自宅で開業するのが当たり前のようによく考えていた。しかし、木塚先生に出会って、視覚障害者であっても大学に進学できるんだ、教師にもなれるんだ…という希望を抱いたことを今でも覚えている。それまでの私は、兄弟9人の末っ子で、宿題は全て兄弟がやり、勉強などは全くしないという有様であった。久我山盲では寄宿舎に入ったので、当然毎日の宿題は自分でやらざるを得なくなり、英語を担当されていた木塚先生には毎日指名され「わかりません」と答えるばかり。先生は理解していない生徒から順に指名していくという指導法(今だったら虐めかも!)で、数ヶ月もしないうちに私は悔しくてたまらなくなり、そのうちに最後の指名を受けてやると、奮起した。また、私たちは団塊の世代、盲学校と言えども同学年は24名、2クラスという大所帯であった。私たちが最上級学年であったため、なぜか私は生徒会長として木塚先生の顧問の下、様々なことを考え実行し始めた。そこでも先生は、あくまでも生徒の自主性を重んじ、生徒皆が思っているのだったら、徹底的に進めるべきだという考えで見守ってくださった。まさに、このことがその後の私の道を決定づけることになり、私に何ができるか分からないが、自分も先生のような生き方をしたいこうと決意した。さらに、勉強だけでなく、最も我々にとって大切なのは、単独歩行や一人生活ができるようになることだということも教えられた。先生の独特の単独歩行のテクニックは、白杖で底辺を手前に三角形を描くごとく一歩進むたびに三連音符のように突く方法であり、たとえ白杖が短くても安全が保てるのだと主張されていた。(いつ頃からだったか、二点歩行が主流になった頃には身長より長い白杖を使用されるようになった。)私が日本ライトハウスを退職し、木塚先生が理事長に就任された頃、ともに東京行きの新幹線で移動したことがあった。お互いにアルコールを飲みながらの3時間だったこともあり、本音での議論が始まった。私は、どこでも大きな声で援助依頼を求めるやり方や余りに長い白杖などは人の邪魔になる、私たちもスマートに振る舞い・行動していくことも大切だと主張したのに対し、「もう私には無理だよ!」と言われた先生には何も言えなかったことをしみじみ思い出す。どうであれ、視覚障害者としての生き方考え方、何も恐れずに立ち向かっていく先生の姿は私にとってまさに「ロールモデル」であった。それは今でいうところの、エンパワメントにも通じるものであり、社会福祉の分野、とりわけ障害者福祉の分野での相談支援でまさに一番の狙いとなる要素かもしれない。相談員全てが障害者が良いとは言えな

いが、中途失明相談や進路相談、様々なサービス利用についても、当事者からのアドバイスはそれだけの有効性と価値を生み出すと私は考えている。どのようなサービスを受けるにも、相談を受けてからというのが今の障害者福祉の原則となっているが、プロとしての理念と専門知識、専門技術を備えた当事者との相談の結果であれば、素晴らしい方向性を生み出せるに違いないと確信している。そのようなことを教師と教え子、人間対人間の関係の中で気づかせてくださったのが木塚泰弘先生であった。

永い間お疲れ様でした。そして、心からありがとうございました。ご冥福をお祈りしています。

---

## わかりよい点字を目指された木塚泰弘先生

日本点字委員会委員 加藤俊和

木塚泰弘先生がお亡くなりになられてから、はや半年あまりが経ちました。本当に幅広い分野で活躍されておられ、私もいくつかの分野で一緒させていただきました。

1972年に国立特殊教育総合研究所（現：国立特別支援教育総合研究所）へと移られた頃から、民間企業に勤めていた私は、東京へ出張に行くたびに久里浜へと寄り道をしていました。言うまでもなく、木塚先生は「養護・訓練」（現在の「自立活動」）の必要性を提唱されて盲学校教育に位置づけられました。視覚障害児教育に欠かせない点字教育も、歩行訓練などと併せて、明確に位置づけられたのでした。また、視覚障害者の空間認知、および触覚など、多くの研究で大きな成果をあげておられました。そして特総研に行くと、そのあとはいつも一緒させていただきましたが、そんな場でも、話題は触覚や点字の話、そして天気の前報も、気象予報士顔負けの技術論で盛り上がっていきました。

言うまでもありませんが、木塚先生が日本点字委員会の会長を務められたのは2002年からですが、1966年に日点委を実質的に創設されたのは木塚先生であり、ずっと日

点委を支えて大きい位置づけにされてこられました。

日本盲人会連合二代目会長の鳥居篤治郎先生は、日本の福祉の世界を牽引される傍ら、点字を体系的にまとめるために1955年に日本点字研究会（日点研）を結成されました。その点字の業績は、点字教科書の基本となった『点字文法』をはじめ、理数関係から邦楽に至るまで、各種の点字関係書を次々と発行するなど尽くしてこられました。

それをさらに発展されたのが木塚先生でした。日本点字委員会の会長になられたのは2002年からですが、盲教育界中心の日点研に、社会福祉界である点字出版と点字図書館の分野を加えて全国の点字の一本化に尽力され、1966年に日本点字委員会（日点委）が創設されたのでした。日点委初代会長の鳥居先生は1970年に亡くなりましたが、木塚先生は鳥居先生の点字分野を立派に引き継がれ、さらに発展されて現在の基礎を作られ、その間の日本の点字表記はまさに木塚泰弘先生を中心に動いていきました。日本点字表記法は、ほぼ10年ごとに改訂されていきましたが、その原案はいつも木塚先生が書かれ、その時々幅広い意見を反映しつつまとめられていました。

ところで、京都に生まれ育った私は、1961年に鳥居先生が長年の課題だった京都ライトハウスを創設された直後から、不遜にも京ラの点字図書館を訪れて館長の鳥居先生とお会いし、その後もときどきお邪魔していました。その鳥居先生がいつもしみじみとおっしゃっておられたのは、「点字は、読みよく書きよくわかりよく、でないといけないよ。」という言葉でした。その重みを改めて感じたのは、木塚先生が原稿を執筆され続けてきた『日本点字表記法』だったのです。何回も改訂を重ねても、木塚先生の原稿には、この鳥居先生の言葉が、ずっと生きていました。

点字は、視覚障害者にとって社会に羽ばたくためのツールであるだけでなく、点字を使用する者が、点字を慈しみ点字を愛し点字を大事にしていかなければならない、との鳥居先生的心情があふれています。その精神を、木塚先生はしっかりと受け止めて本当に長年にわたって点字の世界を高めていただいていたのでした。

木塚先生は、理数系にも外国語にも明るく、1980年代のコンピュータ用点字の前の相互変換用点字、数学、情報処理などをはじめ、日本点字委員会の各種専門委員会もリードしてこられました。2002年に集大成された「文部省最後のマニュアル」とも言われた『点字学習指導の手引』では、木塚先生が触覚の基本からまとめられていく過

程をまざまざと見せていただきました。編集委員会はもちろんのこと、そのあとでのおつきあいでも、飲むのも忘れて？高い理想を述べておられたことを思い出します。

先生は、もちろん支援教育界の重鎮としてのご活躍はいうまでもありませんが、本当に多方面で活躍されてこられました。特総研でも取り組まれていた空間概念と触覚の研究は、具体的な歩行指導や触図・触地図へとつながりました。木塚先生と言えば長い直杖で有名でしたが、視覚障害者の白杖歩行についての深い研究でも大きな貢献をされてこられていました。日盲社協点字出版部会編の『歩行用触地図製作ハンドブック』の編集のときなどは、木塚先生を大阪のホテルにカンヅメにして、徹夜で聞き取っては書き留めていって発行にこぎ着けたようなこともありました。また、木塚先生は共用品の開発では、その草分けとして、豊かな発想で新しい提案をし続けてこられ、浜松でのデザインの研究や教育にも携わってこられました。一方では、私が日本ライトハウスの常務理事だったこともあって法人の理事長にと無理にお願いし、情報部門もさることながら日本の視覚障害リハビリテーションの草分けではあるものの、変革期で大変な状況にあった中を、1999年から14年間にわたって取り仕切ってこられました。

木塚先生、心よりご冥福をお祈り申し上げます。そして、長きにわたって酒を酌み交わし続けていただきましたことに感謝して、今夜も乾杯！

## 故阿佐博氏 略歴

1922年 徳島県三好郡に生まれる。5歳の時に外傷により失明。

徳島盲学校初等部、官立東京盲学校中学部・師範部鍼按科卒業

1944年 岡山県立盲学校教諭

1947年 官立東京盲学校教諭

1984年 筑波大学附属盲学校退官。5月から東京ヘレン・ケラー協会点字出版局編集主筆

1987～2005年 日本盲人キリスト教伝道協議会主筆

2000年 視覚障害者デイケア施設「レモンの木」施設長

2018年 逝去



### 日本点字委員会関係

1955年 日本点字研究会発足より参加、関東選出の常任理事

1966年 日本点字委員会発足に尽力、第1期から委員

1978年 第3期から副会長（3期12年）

1990年 第6期から会長（3期12年）

2002年 会長退任、顧問就任

### 受賞歴

2004年 第1回本間一夫文化賞

### 主な著書

1983年 『主のえだえだ肢々として』（共著、日本基督教団出版局）

1987年 『中村京太郎伝一目を閉じて見るもの』（日本盲人福祉研究会）

1990年 『日本点字100年のあゆみ』（日本点字委員会）

1993年 『道ひとすじ～昭和を生きた盲人たち』（共著、愛盲報恩会）

2006年『点字のレッスン』（視覚障害者支援総合センター）

2012年『点字の履歴書一点字に関する12章』（同上）

2012年『父のノート―盲界九十年を生きて』（同上）

---

## 阿佐博先生 安らかにお休みください

日本点字委員会会友 渡辺 勇喜三

僕が官立東京盲学校初等部6年生の昭和22（1947）年 阿佐先生の着任のご挨拶がありました。先生は、名字の阿佐は徳島県阿波国の「阿」と高知県土佐国の「佐」からきていて、生まれ故郷に多い姓であることをおっしゃいました。

僕が中学部に進み、英語の先生として田中<sup>りゅうしょう</sup>隆尚先生が教えてくださることになりました。語学に堪能な田中先生は、希望者にフランス語も教えてくださるとのことでしたが、僕はフランス語点字の読み書きが分かりませんから、阿佐先生の居室へ、アルファベーターから点字を教えていただこうと伺いました。当時は多くの先生方が、校舎の使用してない空き室に住んでいらっしゃいました。先生は畳の実習室に奥様と長男の光也さんと3人で住んでいらっしゃいました。光也さんが奥様に抱かれて、大人しい子だなあと思いました。

昭和26（1951）年、僕は高等部本科理療科に進み、2年生の時 経絡経穴概論、3年生で病理学と鍼実技という風に、先生の丁寧なご指導をいただきました。

平成29（2017）年12月12日火曜日、20分余の長い電話をいたしました。僕は盲学校の盲人野球史を書いてみたいと思っていましたので、今はグランドソフトボールと言われていますが、その戦前から戦中頃のことを聞かせていただきましたかったです。O.さんという先輩が、大きな当たりを打ってボールがその頃の初等部を飛び越え隣の東大医学部分院の敷地へ飛び込んだことや、K.さん個人と阿佐先生との学生らしい交

わりのことなども話されました。プロ野球の川上選手が、1球目空振り、2球目は大きな当たりを飛ばした話も聞きました。間質性肺炎で治療中とお話しでしたが、声も息づかいもいつものように明快でした。しかしそれがまさか111日後、平成30（2018）年4月1日にお亡くなりになるとは思いませんでした。4月1日は、この年のイースターでした。

阿佐先生 ご指導を本当にありがとうございました。どうぞ安らかにお休みください。

---

## 点字と酒とジャイヤンツ — 見たまま 阿佐博さん

水谷昌文

（私は1992年から8年間、東京ヘレン・ケラー協会点字出版局（当時）で阿佐先生の薫陶を受けた。そんなご縁で、ここに書かせていただくことになった。光栄であり、感謝に堪えない。私の見たまま、感じたままの阿佐先生を書かせていただく。なお、私なりの文章作法上の主義として、以下「さん」付けとする。不遜だと感じる人もあろうが、お許し願いたい。）

私が初めて阿佐さんに会ったのは1958年か9年、視覚障害クリスチャンの集会だった。1950～60年代、視覚障害を持つ牧師さんや盲学校の先生方が〈盲界〉の中で啓発活動に力を注いでおられた関係から、キリスト教の全国集会には全国から盲学生を含めて青年たちが100数十人も集まったものだ。地方の盲学生だった私も末座に列し、阿佐さんにもそこでお会いしたのだ。（余談になるが、私はその集会で、熊谷鉄太郎さん、石松量蔵さん、本間一夫さんら、錚錚たる方がたにお会いした。誇らしい思い出だ。良い時代だった。こんな出会いの場を再現することなど、もはや不可能だ）

阿佐さんの死を伝える文書でもあまり言及されないようだが、阿佐さんはキリスト教の普及にも力を尽くしてこられた。これも数ある業績の一つだと私は思っている。

阿佐さんは東京ヘレン・ケラー協会で、月刊誌「点字ジャーナル」や生活情報誌（月2回）「ライト&ライフ」の編集、点字出版物の校正などをしておられた。職場では局長から新入りの若い職員に至るまで皆から「先生、先生」と敬愛され、一目どころか十目くらいおかれていた。声を荒らげたり、上から目線で説教したりすることはけっしてなく、いつも気さくに、そして鷹揚に接しておられた。生意気なつむじ曲がりの私は時に議論をふっかけたりしたこともあったが、そんな時でも懐深く受け止めて、穏やかに意見を述べておられた。だが、けっして「気の長い人」ではなかったと私はみている。抑えた言葉の端々に怒りや苛立ちが仄見えることもないではなかった。「あっはっは」と大らかに笑いつつ、感情を制御しておられたのではないだろうか。

そんな阿佐さんは酒席でも紳士だった。私の知るかぎり泥酔されたことはなく、言葉の暴走も聞いた記憶がない。良く呑み、良く食べ、そして良く人の話を聞く人だった。

阿佐さんと私は毎日のようにプロ野球の話をした。私はアンチジャイアンツだから、ジャイアンツが負けた翌朝、阿佐さんが愚痴や不満を言い立てるのを聞くのが快感だった。今年のペナントレースにおける「高橋巨人」の戦いぶりをみるにつけ、阿佐さんの愚痴や不満を聞くことができなくて寂しい。

阿佐さんが「点字ジャーナル」の編集長時代、私は記事のとりまとめを仰せついていた。私は原稿を一つずつ阿佐さんのデスクに運ぶ。阿佐さんがゆっくりと原稿を吟味する。その間私は、先生の採点を待つ生徒のように緊張して、「良し」のひと言を待つのだった。若い頃からマスコミに興味や憧れを抱いていた私は、「点字ジャーナル」を〈盲界における健全野党〉にしたかったし、私もひとかどの記者、編集者になりたいと夢見ていた。〈盲界〉という狭い世界で本当の報道が可能かどうかという基本的な命題は、意識的に避けて通ろうとしていた。いっぽう一方阿佐さんは現実を良く知る人だった。点字雑誌に負わされた〈盲界〉の機関誌という側面をも尊重しておられた。私は阿佐さんのそんな編集を通して〈盲界報道〉の侘しい現実を教えられた。正直に言えば当時は不満だったが、今になって無言の教訓に気づいた次第である。

阿佐さんは、「点字毎日」と日本ライトハウスと（ついでに日本共産党とも）同じ1922年の生まれで、点字歴は約90年。日本の点字の変遷を長くみてこられた。私は、「点字毎日」のコンピューター点訳による復刻作業に関わって、紙の「点毎」と点字データ化された「点毎」との読み合わせを手伝っている。点字の古新聞を読むのは楽しい。「へええ、こんな記事が出てる。こんな書き方をしてたんだ」と新発見の連続で、その都度阿佐さんに話してみたくなる。「点字投票の模擬実験が行われた」「中国大陸における関東軍の支配が点図で示された」— 成ろうことなら、阿佐さんと首っ引きでこんな紙面を読み、いろいろなお話を伺ってみたかった。こんな個人的な感慨はさておき、「点毎」創刊号からこの度の「日本点字表記法」改訂版に至るまでの変遷を俯瞰すれば、「点字は一日にしてならず」との思いが深い。

阿佐さんは点字表記の変遷をどのように受け止めてこられたのだろうか。総じて自己の意見を強く主張することはなかったと記憶している。だが全てを容認していたのではないと私はみている。例えば「…する」を全てあけることには当初反対しておられたのではないか。私は賛同していたから、今でも少し気が咎めている。それだけではない。「点訳のてびき」は「日本点字表記法」に先んじて読点や中点の導入、サ変動詞をもマスあけすることを採用し、点訳の現場で実践して既成事実を作った。このような変更そのものには今も賛成だが、日本点字委員会の決定を待たずに新ルールを採用するやりかたは厳に慎むべきだ。私はこのことに加担した。心より謝罪する。阿佐さんも「アンフェアだよ」と言いたかったに違いない。

〈盲界〉の巨星が落ちた。昭和が遠くなった。時代が変わる。視覚障害者の読書も点字をめぐる状況もまた変わる。その際大切なのは、何を変えるか、何を変えてはいけないかという問題だ。この度の改訂で、点字表記特に複合語の切れ続きはより単純化された。拍数や漢字数を判断基準として重視することで、あけるか続けるか迷うことも幾分少なくなった。点訳の現場では「点字表記辞典」や点訳ナビゲーターを活用し、点訳者は悩まずに、しかも皆んな等しくかけるようになりつつある。このような機械的な処理と統一を歓迎する人も多かろう。だが点字表記を考えるうえで、言葉のつながり具合や触読者の読み書きの習慣を軽視しては点字文化は痩せ細り、やがて衰

退する。そうだ。おのおのが考え、意見を持ち寄り、議論することが文化なのだ。

阿佐さんは読書家で、漱石が好き。短歌の創作にも熱心だった。言葉を愛し、点字の好きな人だった。そんな阿佐さんに「書きよく読みよく分かりよい点字とは？」と問いながら、おのおのの現場で点字文化を育んでいきたい。



# 凸面点字器の開発と普及

特定非営利活動法人日本点字普及協会理事長

日本点字委員会委員 藤野 克己

## 1. 開発のきっかけ

今から50年も前の話になりますが、私が当時の神奈川県点字図書館に勤めていたころに途中で視覚障害になった方の点字学習のお手伝いをしていました。まず触読から始めて五十音が読めるようになると、次は書く練習に入ります。「点字は凹面から書くので、読むときと左右が逆の形を右から左へ書きます。」と説明すると、多くの方は「えっ？」と驚き、戸惑い、やがては慣れていくのですが、なかには混乱してしまって、今まで読めていた点字が読めなくなってしまう人もいました。

また、小学校での点字体験や、夏休みに行う「一日点字教室」などで小学生に点字の読み書きを体験してもらう際は、短時間で読み書きを行うため、凹面の点字で自分の名前を書いたあとに、町にある点字サインを読めるようにするために凸面の点字を読む練習をすると、混乱する小学生が多く見受けられました。

「点字は、読むときは凸面を左から右へ読み、点字器で書くときは凹面を右から左へ書く。」これが点字の常識であり、長い間そのように説明してきましたが、改めて考えると、読みと書きの形が違う文字は点字ぐらいしか思い当たりません。

点字を一人でも多くの中途視覚障害の方に読んでいただくため、また、一人でも多くの小学生に点字に親しんでいただくために、読む形の点字を書く点字器ができないかと長年考えてきました。凸面点字器の原理は極めて単純です。定規を凸にし、点筆を凹にすればよいのです。しかし、具体的な取り組みができないまま、長い時間が経過してしまいました。

## 2. 開発に着手

2013年に仲間とNP0法人日本点字普及協会を立ち上げました。点字を普及する活動は、すでに全国各地で行われていて、決して目新しいことではないのですが、点字の

普及を目的とした団体があってもいいとの思いから、活動を始めました。

協会の主な事業に、Lサイズ点字の普及と凸面点字器の開発・普及を掲げ、初年度から事業計画に入れて取り組みを始めました。初代の理事長である高橋實さんが点字出版部会の会議でそのことを紹介したところ、名古屋の人から「岐阜の会社の社長さんが、凸面から書ける点字器を作った」との情報がもたらされました。早速岐阜へ向かい、現物を見せていただきました。プラスチック製で、確かに凸面から点字が書けるのですが、8点であること、一マスの大きさが縦横とも標準サイズの2倍近くあって大きすぎることなど、実用的なものではありませんでした。同様の点字器は千葉県にある金型会社の社長さんも作っていて、同じ人から頼まれていたことが分かりました。お二人に依頼した中途視覚障害の方にもお会いしましたが、私たちが求めているものとは違うことが分かり、連携することができませんでした。

その後、浜松の盲人福祉研究会の斯波さんから、以前地元の業者が製品化したという凸面点字器を送っていただきました。これは凸面から点字がきれいに書けるのですが、名刺サイズに1行16マス、4行が書けるようになっていて、標準サイズよりかなり小さく、中途視覚障害者が使うには厳しいものでした。しかし、この点字器は、凸面点字器を作ることは技術的に可能であることを教えてくれました。

このような経緯から、点字普及協会として新たに開発をするしかないということになりました。人の紹介で島根県出雲市にあるプラスチック製造の会社が協力して下さることになり、何度も試作品を作っていただいていたのはモニタリングを行って改修を重ねました。

この間、(有)出雲樹脂には、以下のような工夫を重ねていただきました。

時系列に記すと、

(1) 点筆の押しすぎによる紙の破れ(開発当初は点筆の先端部を金属パイプで作ることを検討していました。)

→パイプの内側に樹脂を流し込み、一定のところまでしか押し込めないように設計。

(2) 点筆先端用の金属パイプの材料として、希望する寸法(内径・外径)の既製品が見つからなかった。

→パイプでの製作を断念し、点筆先端部を加工する方法へ変更。

(3) 受け板の凸面形状と点筆の凹面形状の組み合わせをどのようにするのか。

→ 何種類ものパターンを製作し、何度も試したうえで形状を決定。

(4) 点筆先端部も樹脂で製作（安価に押さえるため）。しかし、点字を書く際に非常に押しにくく、また点字が書けたか分かりにくいといった意見が多数あった。

→ 先端部を再度金属に変更し、押したときに『ぼつつ』感が出るようにした。

(5) 点間に対して点筆の外形が大きいため虚点（書かない点）が出やすいことが判明。

→ 当時はLサイズ点字の点の規格（大きさ、高さ）を採用していたが、標準サイズの点の規格に変更し、点筆の外径を最小限に小さくすることで、点間の隙間を確保し虚点が出にくい寸法にした。

素人としては、点字器の凸と凹を逆にすればよいとの単純な発想でしたが、いざ製品を作るとなると、そう単純にはいきませんでした。上から紙を押して下に凹点を出すときと、上から紙を押して下に凸点を出すときでは、紙にかかる圧力が違ってくるのです。紙が破れたり、気になるくらい虚点が出たりすることが続き、出雲樹脂にはかなりの無理難題をお願いすることになりました。

開発を始めてから完成するまで、多くの方にその時々の試作品を試していただきました。毎年東京で開催される「サイトワールド」の初日（11月1日：日本の点字制定記念日）には、点字普及のイベントを行い、多くの来場者に試作品を試していただき、感想や意見を伺いました。さらに10名以上の方に完成に近い試作品を郵送してモニタリングをしていただきました。

このように協会として開発に取り組んでから3年、2017年11月に凸面点字器を完成させることができました。完成した凸面点字器は「トツテンくん」と名付けました。

### 3. 「トツテンくん」の特徴

1. 読む点字の形を、そのまま書くことができる。
2. 1行を26マスにして、Lサイズ点字とほぼ同じマス間・点間にしてある。（マスの大きさ・マス間は、「だいてん丸」とほぼ同じ）

3. 定規上板のマスの子に点筆のガイド用の凹みを付け、点字を書きやすくしてある。
4. 定規上板をスケルトン（半透明）にし、墨字の位置に合わせて点字を書くことができるようにしてある。

なお、「トツテンくん」には短所もあります。

1. 僅かながら虚点が出る。
2. 定規下板に凸の点があるために点筆がすべらず、速く書くことに適さない。

今まで点字を書いている人にとっては、右から書こうとしたり、点字を書いた紙を裏返そうとしたりして戸惑うことが多く、決して評判がいいものではありません。

しかし、先に書いたように、中途視覚障害の方が点字を学習する際や、短い時間で点字の読み書き体験をする際には効果を発揮すると思います。すでに、凸面点字器で点字体験を行った複数の方から、効果があったとの声が寄せられています。

#### 4. おわりに

従来の点字器に加え、目的や必要に応じてこの「トツテンくん」を使っていただくことによって、多くの方が気軽に点字に親しんでくださることを願っています。「選択の幅を広げる」効果を「トツテンくん」は持っています。

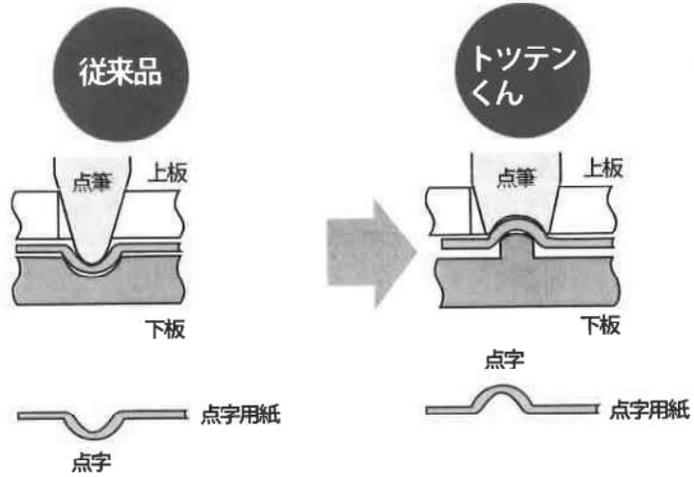
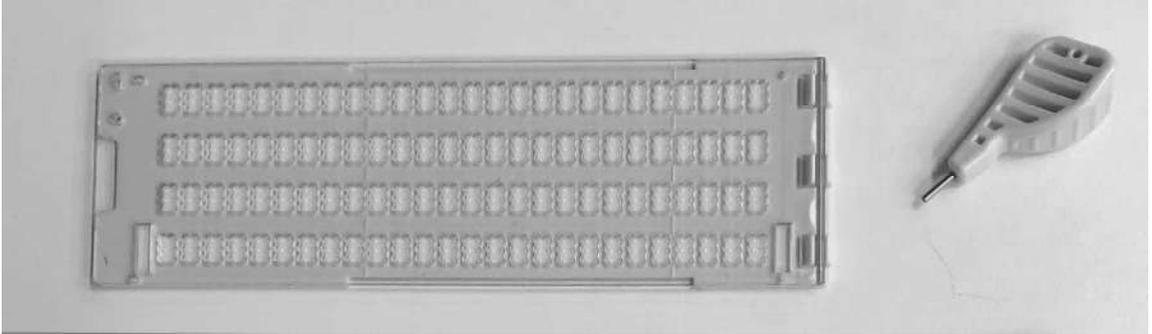
それぞれの人に合った方法で点字を読み、点字を書く。ある人は従来の凹面点字器を使い、ある人は、Lサイズ点字を読み、トツテンくん点字を書く……。こうして日本の点字普及率の向上につなげていきたいと思っています。

#### 凸面点字器「トツテンくん」

企画：特定非営利活動法人 日本点字普及協会

開発・製造元：有限会社 出雲樹脂

発売元：有限会社 読書工房（価格 1,500円）



下に点が出るので、裏面から見た点字の形を右から左へ書きます。

上に点が出るので、読む形の点字を左から右へ書きます。

## 点字関係文献目録（その17）

2016年9月から2018年8月までに刊行された点字に関する単行本や小冊子、各種論文、関係資料、社会福祉法人視覚障害者支援総合センターの編集になる「視覚障害－その研究と情報－」（No. 340～363）等に掲載された点字関係の文献を集録しました。

### 単行本・小冊子等

- 福井哲也著 『UEBベーシックマスター 英語点訳の基礎』 日本ライトハウス  
2016年9月
- ナツメ社 『感動がいっぱい！勇気の伝記』（目の不自由な人のために6点の点字を考案したルイ・ブライユ） 2016年12月
- 共用品推進機構 『インクル No.106』（特集：点字と共用品） 2017年1月
- 日本規格協会 『アクセシブルデザイン－標識，設備及び機器への点字の適用方法 JIS T0921』 2017年2月
- 牟田口辰己著 『盲児に対する点字読み指導法の研究 点字読み熟達者の手の使い方の分析を通して』 慶應義塾大学出版会 2017年2月
- 山本徳造著、広瀬浩二郎監修 『ルイ・ブライユ－暗闇に光を灯した十五歳の点字発明者』 2017年3月
- 日本点字技能師協会編 『点字技能検定試験の対策 過去問題（第17回）の正答と解説』 日本点字技能師協会 2017年4月
- 日本点字図書館監修 『もっと知ろう！点字－点字の読み方から、歴史、最新技術まで－』 ポプラ社 2017年4月
- アイダス実行委員会編 『Pin 37号』（点字の現状を皆で知る 点字の歴史 点字の現状に関する覚え書き 点字機器のこれから 点字による情報保障の立場から 私と点字 点字と私） 視覚障害情報機器アクセスサポート協会 2017年5月
- 日本点字委員会 『日本の点字 第41号』（点字に感謝 日本点字委員会創立50年記念特別講演会記録 点字JISとISO 特集「当山啓さんを偲んで」 点字関係文献目録〔その16〕等） 2017年6月

- 日本点字委員会 『日本の点字 第42号』(点字と私 『日本点字表記法』改訂版(案)における主な変更点 レポート 教科書点訳とUEB 数学・理科・情報処理用点字記号専門委員会の設置について等) 2018年2月
- 日本点字委員会監修 『手で読む心でさわるやさしい点字 1 点字を読んでもみよう』国土社 2018年2月
- 日本点字技能師協会編 『点字技能検定試験の対策 過去問題(第18回)の正答と解説』 日本点字技能師協会 2018年4月
- 日本点字普及協会著、日本点字委員会監修 『手で読む心でさわるやさしい点字 2 点字を書いてみよう』 国土社 2018年4月
- 日本点字委員会監修 『手で読む心でさわるやさしい点字 3 点字をさがしてみよう』 国土社 2018年4月
- 日本点字図書館著 『点字にチャレンジ! -マンガでおぼえる点字のしくみ』 日本点字図書館 2018年8月

#### 研究誌等の論文

- 塩崎真也 全日盲研授業実践報告 本校における点字指導-実態調査を通して- 「視覚障害」No.342 2016年11月
- 古谷妙子 目と手と声と、それから… 第1回 つつじ点訳友の会 「視覚障害」No.347 2017年4月
- 武井俊彦 留学生が語る、各国の点字事情-日本点字普及協会公開講座- 「視覚障害」No.349 2017年6月
- 出井博之 全日盲研授業実践報告 身近な言葉に焦点を当てた国語の授業-高等部重複障害学級の点字使用生徒への指導 「視覚障害」No.349 2017年6月
- 和田勉 『日本点字表記法』改訂その他の流れについて-日点委総会・研究協議会から 「視覚障害」No.350 2017年11月
- 武井俊彦 教科書点訳を支えるソフトとプリンタ事情-教点連平成29年度第1回セミナー 「視覚障害」No.351 2017年8月
- 渡邊賢一 全日盲研授業実践報告 解剖学アプリを補完する立体図作製の取組-既存の点図作製ソフトを使用して 「視覚障害」No.351 2017年8月

- 日本点字委員会 『日本点字表記法』の改訂版発行と意見の募集について 「視覚障害」No.357 2017年2月
- 藤野克己 凸面点字器「トツテンくん」が完成しました 「視覚障害」No.358 2018年3月
- 千葉康彦 視覚特別支援教育の場景 重複障害生徒の点字導入から実用まで－小学部3年生から中学部3年生までの7年間の経過から－ 「視覚障害」No.361 2018年6月
- 「視覚障害」編集部 それぞれの思い出 阿佐博さんを偲んで 「視覚障害」No.362 7月号
- 「視覚障害」編集部 2018年度内に点字表記法を改訂 日点委が総会で決定 「視覚障害」No.362 7月号
- 「視覚障害」編集部 点字について幅広く学ぶ 日点協が研修会を開催 「視覚障害」No.362 7月号
- 「視覚障害」編集部 点字教科書と学習環境について考える 教点連セミナーで講演 「視覚障害」No.362 7月号
- 「視覚障害」編集部 点字楽譜を守り、広めるために 点譜連の集いで上田喬子さんがお話と歌 「視覚障害」No.363 8月号
- 原田早苗 古文の点字表記について－分ち書きと切れ続き－ 視覚障害教育ブックレットNo.32 ジアース教育新社 2016年12月
- 高村明良 触察の力の基礎を育てる(その1)－盲学校点字教科書算数1年第1巻『指たどり』を使って 視覚障害教育ブックレットNo.32 ジアース教育新社 2016年12月
- 高村明良 触察の力の基礎を育てる(その2)－盲学校点字教科書算数1年第1巻『指たどり』を使って 視覚障害教育ブックレットNo.33 ジアース教育新社 2017年2月
- 清和嘉子 「触図・触覚教材に関するワークショップ」の報告 視覚障害教育ブックレットNo.33 ジアース教育新社 2017年2月
- 高村明良 触察の力の基礎を育てる(その3)－盲学校点字教科書算数1年第1巻『指たどり』を使って 視覚障害教育ブックレットNo.35 ジアース教育新社 2017年1

2月

高村明良 触察の力の基礎を育てる(その4)－盲学校点字教科書算数1年第1巻『指たどり』を使って 視覚障害教育ブックレットNo.37 ジアース教育新社 2018年7月

佐藤信行 点字教科書を図解してみよう(その1)－中学校社会「歴史」を例に－ 視覚障害教育ブックレットNo.37 ジアース教育新社 2018年7月

村山佳寿子 東京盲学校における箏曲の点字記譜法について：点字楽譜『宮城道雄作曲集』を例として 民族芸術 34 2018年

なかの まき ことばの表記 点字と墨字のわかちがきについて ことばと文字 (7) 日本のローマ字社 2017年 4月

藤芳衛、藤芳明生、石田透 重度視覚障害を有する教職員等の点字教材の自立的作図を可能にするBplot 日本教育工学会論文誌 41(2) 日本教育工学会

大財誠 点字初期指導におけるプリント教材の例 研究紀要 48 筑波大学附属視覚特別支援学校 2016年7月

濱谷和江 漢文の試験問題の点字化について 研究紀要 48 筑波大学附属視覚特別支援学校 2016年7月

西村崇宏、土井幸輝、藤本浩志、和田勉 点字触読初心者における紙点字の縦横点間隔と触読性の関係 国立特別支援教育総合研究所研究紀要 44 2017年3月

丹羽弘子 通常学級で学ぶ小学生への点字支援：小学校弱視通級指導学級および盲学校における通級指導の一例 弱視教育 54(4) 日本弱視教育研究会 2017年3月

佐藤将朗 点字触読研究の展望：点字の読みやすさに関する研究知見の指導実践への応用 特殊教育学研究 55(1) 日本特殊教育学会 2017年5月

日本人事試験研究センター 公共部門の人事試験情報 平成29年度点字試験の実施状況等について 試験と研修 39 公務人材開発協会 2018年1月

柴田保之 先天性の盲聾児に対する点字や指文字による言語教育の可能性 國學院大學人間開発学研究 9 國學院大學人間開発学会 2018年2月

長尾博 点図読み取り指導プログラムの開発における段階的指導に適した触図課題の作成とその排列に関する研究 宮城教育大学特別支援教育総合研究センター研究紀要 12 宮城教育大学教員キャリア研究機構 2017年6月

- 門脇弘樹、菊池志乃、牟田口辰己 点字読速度と読指運動軌跡の関連 障害科学研究  
42 障害科学学会 2018年3月
- 宮城愛美、佐藤正幸 盲ろう学生向けE-learningシステムの開発に向けた検討(その2)  
講義場面における点字端末と文字通訳ソフトを用いた情報保障 電子情報通信学会  
技術研究報告 117(502) 電子情報通信学会 2018年3月
- 田中徹二 視覚障害者への図書提供：発展過程とサービス内容 明治大学図書館情  
報学研究会紀要(8) 明治大学図書館情報学研究会 2017年3月
- 大門貴彦 北海少年院における「点訳絵本指導」について 刑政 128(6) 矯正協会  
2017年6月
- 渡辺 哲也、小林 真、南谷 和範 視覚障害者のための点訳・音訳サービス利用状況  
調査 ヒューマンインタフェース学会論文誌 20(1) ヒューマンインタフェース学  
会 2018年2月
- 西脇智子 日本盲人図書館における点訳奉仕活動の実態 「点訳奉仕者個人別台帳」  
の閲覧結果より 実践女子大学短期大学部紀要 39 実践女子大学 2018年3月
- 元木章博、星野ゆう子 誤答分析による点字学習者の「つまずき」の明確化 電子情  
報通信学会技術研究報告 117(188) 電子情報通信学会 2017年8月
- 星野ゆう子、元木章博 点字鏡像関係の直感的理解を助ける表示方法に関する一考察  
教育情報研究 33(2) 日本教育情報学会 2017年12月
- 中田真由美、清本憲太 メントール剤の前腕貼付が糖尿病視覚障害者の触覚機能およ  
び点字触読に及ぼす影響 作業療法 36(6) 日本作業療法士協会 2017年12月
- 伊藤貴宏、伊藤祥一、藤澤義範 感圧センサによる点字読み取り 電子情報通信学会  
技術研究報告 117(502) 電子情報通信学会 2018年3月
- 辻聡史、折居英章、小浜輝彦、江田孝治 指先に取り付け可能な電気触覚点字ディス  
プレイの開発 福岡大学工学集報 100 福岡大学研究推進部 2018年3月
- 小出優真 センサから読み取られた点字データの誤り訂正 電子情報通信学会技術研  
究報告 118(78) 電子情報通信学会 2018年6月
- 加藤一夫、市川あゆみ 解剖学におけるカラー版触図の作成 筑波技術大学テクノレ  
ポート 24(1) 筑波技術大学学術・社会貢献推進委員会 2016年12月
- 末永一輝、渡辺哲也 点図による触知路線図における点記号に関する基礎的検討 電

子情報通信学会技術研究報告 116(519) 電子情報通信学会 2017年3月

田中雅大 日本における触地図の社会的位置付け 日本地理学会発表要旨集 2017a  
(0) 日本地理学会 2017年10月

渡辺哲也、加賀 大、小林真、南谷和範 視覚障害者のための触図訳サービスに関する調査 ヒューマンインタフェース学会論文誌 20(2) ヒューマンインタフェース学会 2018年5月

渡辺哲也、小林真、南谷和範 視覚障害者のための触図訳サービス利用状況調査 電子情報通信学会技術研究報告 117(188) 電子情報通信学会 2017年8月

## 2018年度研究協議会並びに第54回総会報告

2018年6月2日(土)～3日(日)、横浜あゆみ荘で、標記の協議会・総会を開催した。開会に先だち、木塚泰弘前会長、阿佐博元会長に対し、参加者全員で黙祷を捧げた。盲教育界および盲人社会福祉界より選出された第13期委員は、以下16名の各氏。青松利明(筑波大学附属視覚特別支援学校)、岩屋芳夫(横浜市立盲特別支援学校)、河出充展(岐阜県立岐阜盲学校)、中村恒子(山形県立山形盲学校)、馬場洋子(神戸市立盲学校)、平松智子(和歌山県立和歌山盲学校)、溝上弥生(愛知県立名古屋盲学校)、安川和子(香川県立盲学校)、大澤剛(三重県視覚障害者支援センター)、加藤三保子(福島視覚情報サポートセンターにじ)、佐賀善司(岩手県立視聴覚障がい者情報センター)、白井康晴(東京点字出版社)、福井哲也(日本ライトハウス点字情報技術センター)、水谷吉文(天理教点字文庫)、山本令子(東京ヘレン・ケラー協会点字出版社)、渡辺昭一(京都ライトハウス情報製作センター)。

両界代表委員協議会において、学識経験委員として加藤俊和、金子昭、竹下義樹(日本盲人会連合)、田中徹二、藤野克己、宮村健二、和内正也(全国盲学校長会)、和田勉(以上再任)、長岡英司(新任)の各氏が選出された。

委員22名、事務局員4名、会友3名、オブザーバー等33名、計62名の出席があった。1名から委任状が提出された。

### 総会

#### (1) 役員等の改選について

- ①会長に渡辺昭一(新任)、副会長に金子昭(再任)・藤野克己(新任)、事務局長に和田勉(再任)が選出された。
- ②会計監査委員に道村静江(再任、会友)、首藤浩(新任、会友)が選出された。
- ③事務局員として、小川眞美子(新任)、奥野真里、小野明男、畑中真弓、畑中優二、花田和枝(以上再任)が承認された。

#### (2) 『日本点字表記法』改訂版編集委員会より、下記の報告があった。

「表記法」(案)に多くの意見が寄せられた。意見を寄せてくださった多くの団

体・個人にお礼申し上げたい。前回総会以後、編集委員会は第7回、および第8回を、作業部会は、第8回～第10回を開催した。

(3) 数学・理科・情報処理記号専門委員会より、下記の報告があった。

全体会を2回開催した。数学・情報処理と理科を分けて部会を設けて審議し、改訂の概要をまとめた。情報処理を数学と一緒にして表記法から分離するという提案もある。

(4) 『日本点字表記法』改訂版を発行することが承認された。書名は『日本点字表記法 2018年版』とする。墨字・点字同時発行を目指す。墨字版は電子書籍でも出す予定。

## 研究協議

### 1. 『日本点字表記法』改訂版(案)について

各章について、次のような討議が行われた。

#### 第2章

2節1. 「外来語や外国語の地名や人名の仮名表記」は、内閣告示の「外来語の表記」に基づいている。「外大大SHIFT□キー」の表記について。「ユーディーキャスト」は「外大大UDC外 a s t」ではなく、「外大U大D大C a s t」と書くべきだ。

3節9. 「文字や略称を書き表すアルファベット」(1)【注意2】の「最後の一文字だけが小文字」でよいのか。

#### 第3章

「独立性の強い」「独立性の弱い」はどのように判断するのか。それは相対的なもので、それぞれの判断基準でよいのではないか。外来語の切れ続きは、項目を設けるまでにはまとまらなかったもので、2節3. 「複合名詞の構成要素の意味のまとまりと切れ続き」(1)(2)の用例を見ていただきたい。拍数で判断し、語種にこだわらない書き方はできないか。拍数は重要な要素だが、それだけで切れ続きを判断することはできない。最近では機械的に切る方向に動いているが、「表記法」に書かれていることを守っていききたい。

## 第4章

説明カッコは続けて、挿入カッコは切ることになっているが、どちらかはっきりしないものもある。スラッシュが3種類あるが、整理できないか。あくまでスラッシュは③④の点で、アルファベットモードにするときには⑤⑥の点を前置するという考えだ。外国語引用符の後ろを、マスあけせずにカッコを書くことの是非。

## 第5章

見出しに用いるり下がり口下がりカッコがなくなったが、第4段階の見出しについては、現行「表記法」に準じて処理するとよい。

## 第6章

2節2項2.【注意3】「～敬意などを表す補助用言の前で区切って書き表してもよい」は、馴染まない。

## 第7章

特になし

## 2. 数学等の点字表記に関する改訂案概要について

数学・理科・情報処理記号専門委員会より、「数学等の点字表記に関する改訂概要について」の資料に基づき説明があった。カッコから始まる数式に数式指示符を前置すること、暫定改訂版「4.2 数式内のマスあけについて」《注意》但し書きの削除範囲について、分数囲み記号（み も）を小学部から導入することなどについて討議された。表記法から情報処理解説を分離する方針を含む概要案（次ページ）がおおむね承認された。

# 数学・理科・情報処理点字表記に関する改訂案概要

2018年6月2日

数学・理科・情報処理記号専門委員会

## 1. 「改訂」検討の概要について

### (1) 「解説」の冊子

「数学・情報処理点字表記解説2019年版」及び「理科点字表記解説2019年版」（いずれも仮称）の2種類とする。（『日本点字表記法2001年版』の巻末に掲載されていた「情報処理用点字表記の解説」を分離し、「数学解説」と合冊する。）

### (2) 内容についての方針点

「暫定版」発行から20年近くを経ておおむね定着しており、大幅な変更は行わない。

## 2. 主な変更内容

### (1) 単位の表現について

ア. 小学校・中学校、及び高校（高校の理科分野を除く）においては、単位カッコ  $\text{m/s}$   $\text{m/s}$  を使用しないことを原則とし、文中で数字に続く単位は、特に必要のない限り  $\text{m/s}$  で表記する。

$3\text{m/s}$   $v=3.1\text{m/s}$   $v=3.0[\text{m/s}]$

$\text{m/s}$ （墨字で単位がカッコで囲まれている場合は  $\text{m/s}$  を用いる。）（したがって、表記法では「単位カッコ」についてふれる必要はないと思われる。）

イ. 「モル/L」のような日本語で始まる単位にも  $\text{mol/L}$  の前に  $\text{m}$  を置いて、 $\text{mol/L}$  とする。（二重カッコと同型になるが、前後で判別は可能である。）

ウ. 「理科解説」第1部1.8「単位」(3)の「漢字や仮名の単位はなるべく該当するアルファベットに置き換えて表す」の表現は削除する。

エ. リットルの単位記号については、墨字では、教科書も一般の表示も大文字の「L」



イ.  $y = -3$ ,  $y = -1$  のように、二つの式に分けて考えられるものは、間に墨字のコンマがあっても数式のコンマは使用しない。

ウ. 数式の後にあるコンマ等が日本語の読点の意味としてのコンマの場合は読点  $\text{⋮}$  で表すが、前後の関係によってはマスあけに置き換えてもよい。

#### (4) URLやメールアドレスなどの記号について

ア. 情報処理用記号については変更しない（UEBの記号の導入はしない）。

その理由は、これまでの記号との違いが大きすぎることで、日本の記号はマス数なども含めてよくできた記号であることによる。

イ. 情報処理用記号体系ではナチュラル表記を最も標準的な書き方とする。

（したがって、表記法において「ナチュラル表記」などの表現の必要はなくなると思われる。）

ウ. 半角カナはほとんど使用されなくなっているが、点字記号は残す。

エ. 通常のホームページの画面などは情報処理用記号体系とはせず、一般日本語点字として考える。

#### (5) その他

ア. 虫食い算などにおいては、伏せた数字部を「 $\text{⋮}$ 」のみで表す。

イ. 「数学解説」第2部5. 1 g (7) の「数式中のスラッシュ」は用途が限られており、弊害もないので、記号は残す。

ウ. 立体指示符の記号は、高校物理においても原則として使用しない。（記号の定義は残す。）

エ. 化学式の元素記号等の表記は従来どおりの記号体系とする。

オ. 「理科解説」第3部2. 2 化学分野における錯イオンとイオン濃度を表す角カッコ  $[ ]$   $\text{⋮}$   $\text{⋮}$  は、数学記号の大カッコと同じ  $\text{⋮}$   $\text{⋮}$  に変更する。

カ. (削除)

キ. 動植物名や化学物質名の長い専門用語については、意味上の区切りごとに第1つなぎ符  $\text{⋮}$  を挟んで、ひと繋がり語であることが分かるようにすると規定して

きた。しかし、一般日本語表記においては、専門用語についても読みやすく適宜マスあけして書くことが原則となってきたので、理科関係の専門用語についても「適宜マスあけをして書くことを基本にしながらも、必要に応じて、意味上の区切りごとに第1つなぎ符 ㉒ を挟むなど、ひと繋がりの語であることが分かるように配慮することができる」などの表現を検討する。

(以上)

## 編集後記

お変わりありませんか。「日本の点字 第43号」をお届けいたします。

今回は点字の「現場」を考えさせられる文章が寄せられたと思います。

会長・渡辺昭一さんは、巻頭言〈新しい「表記法」を力に、点字文化の未来の担い手の育成につなげたい！〉を書いておられます。その中で、「選挙公報製作に見る点字のプロたちの苦悩」についてふれています。日常、そのお仕事に関わっておられる立場からのご発言です。読者のために、衆参両院の比例代表選挙、及び最高裁判所裁判官の国民審査の公報について、「選挙のお知らせ」（点字毎日号外）として配布する形で、情報保障が行われています。小選挙区については、地域によっては必ずしも全文点訳となっていないところもあるかもしれないとのこと。

拝見すると、そのお仕事が生産する施設にとって大きな負担になっていることが分かります。多くの分量の「選挙のお知らせ」を選挙の公示日から5日～6日の短期間に製作し、選管等（地域によっては個別発送もあり）に発送しなければならないのです。公示日を含めて3日間ほどは極度に緊張が高まるといいます。そのような困難を押し、情報を届けようとするプロの「現場」のあることを知りました。

藤野克己さんの「凸面点字器の開発と普及」は、点字の指導の現場、学習の現場について考えさせてくれる一文です。《「点字は凹面から書くので、読むときと左右が逆の形を右から左へ書きます。」と説明すると、多くの方は「えっ？」と驚き、戸惑い、やがては慣れていくのですが、なかには混乱してしまって、今まで読めていた点字が読めなくなってしまう人もいました》（藤野さん）といったことは、初心者に点字指導をしたことのある人なら必ずとっていいほど経験することです。その解決の一つとして、日本点字普及協会によって凸面点字器の開発と普及が進められました。読む点字の形を、そのまま書くことができる凸面点字器が、「選択の幅を広げる」ために普及することを願っています。

筆者が初めて凸面点字器の話聞いたとき、附属盲学校の資料室に似たようなもの

があると聞いたことを思い出しました。凸点式点字盤(バブラセック考案)です。バブラセックは、点字の読み方と書き方を同一にするために考案しました。しかし点字を打つのに力を要すること、点筆の凹部を点字盤の凸部に合わせる事が簡単ではない、などの理由で、普及しなかったようです。視覚障害教育の現場に身を置いたことのある筆者の自戒も込めて言えば、教材・教具の実践・研究・改良が、その場かぎりではなく、次の世代に継承されることの必要性を痛感します。

日本点字普及協会はLサイズ点字の普及も行っています。

点字の現場ということで、もう一つ。

日点委は国土社発行の「手で読む 心でさわる やさしい点字」シリーズの監修を行っています。このたび、その④「点字をささえる人びと」が発刊されました。本書の中で「点字をささえる人びと」として、点訳ボランティア・館佳子さん、点字図書館職員・奥野真里さん、点字指導員・黒崎よし乃さん、点字新聞記者・佐木理人さん、視覚支援学校教諭・渡邊寛子さんが紹介されています。インタビューを構成したもので、点字の「現場」が生き生きと伝わってくる思いです。

本号には『日本点字表記法』改訂版(2018年版)における主な変更点、その2」を掲載しました。本年、『日本点字表記法 2018年版』が発刊されました。「日本の点字 第42号」に掲載した『日本点字表記法』改定版(案)における主な変更点」とあわせて、新しい「表記法」のご理解に活用していただけるとありがたいと思います。

本号に阿佐博先生、木塚泰弘先生の追悼原稿を寄せていただきました。創立時から日点委を支えてくださった先生方のご冥福をお祈りいたします。

(金子昭)

日 本 の 点 字 第43号

---

---

2019年 6月30日発行

発 行 日 本 点 字 委 員 会

〒169-8586 東京都新宿区高田馬場1-23-4

日本点字図書館内

電話 (03)3209-0671

FAX (03)3209-0672

振替口座 00100-1-42820

ホームページ <http://www.braille.jp/>

---

---